

迷宮都市 の 錬金薬師

覚醒スキル【製薬】で今度こそ幸せに暮らします!

4

[著]

織部ソマリ

Oribe Somari

[ill.]

ガラスノ



アルベール



巨大な冒険者集団の
リーダーを務める貴族。
誰にでも優しく勇敢。

ギェスターザ



冒険者ギルド長。
赤ん坊だったロイを拾い、
色々世話を焼いてくれている。

ベアトリス



世界に数人しかいない
錬金術師のうちの一人。
不思議なオーラをまとっている。

CHARACTERS

ククルル



猫の妖精ケットシーの
子供。古文書が大好きで
収集癖がある。



プラム



迷宮で出会ったスライム。
目や口はないけど、
感情表現が豊か。

リディ



ハーフェルフの冒険者。
素直な性格。純粹すぎて、
ちょっぴり危なっかしい。



ロイ



本作の主人公。
ある日【製薬】スキルが覚醒し、
人生が一変する。
薬作りへの探求心がとても強い。



第一章 迷宮城にあるもの

「それじゃロペル、店番よろしくね！」

『いってくるね』

白いローブを着て大きなりュックを背負った僕——ロイは、カララン、とドアベルを鳴らし、開店準備をするロペルたちに手を振った。

肩に乗るスライムのプラムも、両手(?)をにゅつと伸ばして皆に振る。

「きをつけてね、ロイ」

控えめに手を振り返すロペルは、僕とそっくりの顔で、そっくりの白いローブ姿。

ロペルはドッペルスライムという珍しい種類のスライムで、人や生き物そっくりに変化することができる。

店番をする時は、今みたいに僕の姿になつてることが多い。

『いってら〜』

『がんばって〜』

『おみやげは、めいきゅういちごがいいな〜』

薬瓶が並ぶ棚を掃除する、小さなスライムたちからはそんな声が聞こえてきた。これは僕と、従魔であるスライムたちの間でだけ聞こえる声だ。

この声が聞こえるのは、僕が持つスキルのおかげ。僕と、従魔であるスライムたちは、こんなふうに会話ができるんだ。

「ふふっ、いつてきます！」

僕がもう一度手を振ると、青銅級冒険者の印である、青銅の腕輪がキラリと輝いた。

迷宮都市ラブリユス。

街の中央には、七大迷宮の一つ『地下迷宮城ラブリユス』がある。国中から集まった冒険者や商人たちで賑わう大きな街だ。

その大通り沿いにある『錬金薬師ロイの店』。

通りに掲げた鉄製の看板には、店名と共に薬草、薬瓶、それにスライムがデザインされている。スライムと一緒に薬を作つて売る、なんとも僕らしい看板でしょう？

お店の建物はリフォームしたばかり。ひび割れ一つない、落ち着いた色の壁。花籠で飾られた窓と入口。ピカピカの取っ手がついた重厚感のある扉。

うん。とつても立派でセンスがいい！

駆け出しの青銅級冒険者で、錬金薬師と名乗り始めたばかり、錬金術師の師匠を持ったばかりの僕には過ぎたお店だ。

「ほんと、同じ建物とは思えないよね」

僕は早朝の大通りを走りながら呟いた。

僕のお店は、少し前まで『バスチア魔法薬店』というお店だった。

僕が住み込みで働く奉公先でもあったんだけど、今とは違うゴテゴテした外観で、工房や住居部分はポロポロ。お客さんに見える表側だけは綺麗にしていた。

元々は評判のいい魔法薬店だった。でも、受け継いだ旦那様と若旦那さんが良くなかった。魔法薬師としての腕は二流、経営者としても二流で、人柄は三流。

僕ら奉公人は、薬師の勉強はほとんどできず、睡眠不足と空腹を抱え、酷使される日々だった。そんな毎日でも僕が頑張れたのは、魔法薬師になりたいという夢があったからだ。

それから、捨て子だった僕を拾ってくれた、冒険者ギルド長のギユスターヴさん。羊獣人のエリサさんを筆頭に、僕を可愛がってくれるギルド職員のみんな、近所の人たち……みんなの応援があったから、いつか一人前になる日を夢見て、歯を食いしばり励んでいた。

だけど冒険者登録をした、十三歳の誕生日。

僕の日常は一変した。

その日、僕は通称ハズレと呼ばれる迷宮——『西の崖のハズレ』へ行った。

迷宮とは、大昔に錬金術で栄えた古王国が、天変地異で地中に沈み、滅亡した後でできたものらしい。

街の中心にある『地下迷宮城ラブリュス』は、元は古王国の主、錬金王が暮らしていた城だと言われている。

迷宮城は、浅層部、中層部、深層部と、深くなるにつれて出現する魔物が強くなり、採取できる素材も増え、高品質になる。

それは魔素——魔力の素になる物質の濃度が関係している。

魔素は地上にもあるけど、迷宮のある地下と比べたら薄い。同じ薬草でも、迷宮のものど地上で採取したものでは、効力が全然違うんだ。

だから迷宮城に人が集まり、街にも人が集まる。迷宮城は冒険者だけでなく、ラブリュスの皆にとつての宝物だ。

でも、西の崖のハズレは違う。

『ハズレ』と名の付く迷宮は、大部分が地上に露出している、魔素が薄く価値の低い迷宮だ。

階層は浅く、出現する魔物も弱い。採取できる素材の種類や品質もそれなりだ。その代わり、冒険者登録前の子供でも入れるんだけどね。

そんなハズレ迷宮で、僕はスライムのプラムと出会い、これまで未発見だった場所に導かれ、不思議な塔を見つけた。

そして、前世を思い出したんだ。

僕の前世は、古王国の錬金王が作った『製薬スライム』。薬草や毒草を食べ、『薬玉』という形で

薬を生成するレアスライムだ。

さらに僕は、前世の記憶と共にスキルを覚醒させた。

手に入れたスキルは【製薬】と【友誼】。

どちらも前世の影響が強い、こんなスキルだ。

スキル【製薬】

一級…望む薬を完璧に生成できます

スキル効果…《調合良》《時短》《素材解》《レシピ解》《高品質》

スキル【友誼】

四級…心を通わせた魔物をテイムできます

スキル効果…《スライム》《以心伝心》

【製薬】は製薬スライムが持っていた能力で、このスキルで作った『キラキラポーション』は、冒険者ギルドで飛ぶように売れた。

【友誼】は心を通わせた魔物をテイムできるというもの。僕の場合、スキル効果にあるスライムだけを従魔にできる。

僕がプラムやロベル、スライムたちをタイムできたのは、このスキルのおかげだ。そうそう、新しい出会いもたくさんあった。

冒険者ギルドで知り合ったのは、同じ青銅級冒険者でハーフェルフの女の子、リディ。

ケットシーの男の子クルルくんや、今は師匠となった『白夜の錬金術師』ベアトリスさん。冒険者克蘭——多くの冒険者が所属する集団——『イグニス』を率いる迷宮伯家の次男、アルベル様とも知り合いになった。

そして、冒険者になったその頃のことだった。

バスチア魔法薬店の阿漕あこぎな商売が公おおやけになり、旦那様たちは捕縛され、店はなくなった。

もちろん僕ら奉公人は解雇。ひどい店から解放されてスッキリしたが、あの若旦那さんが黙っているはずはなく……僕を逆恨みして攻撃を仕掛けてきた。

僕はなんとか撃退したけど、プラムが瀕死ひんしの重傷を負ってしまった。

その時だった。『プラムを助きたい！』という僕の願いが通じたのか、僕が持つスキル【製薬】が、【創薬】へと進化した。

【創薬】は、キラキラポーシオンよりも強力な、新しい薬を生み出せるこんなスキルだ。

スキル【創薬】

五級…望む薬を創り出せます

スキル効果…【創薬】《創造》

【製薬】《調合良》《時短》《素材解》《レシピ解》《高品質》

ついでに【友誼】のスキルも上がったんだよね。

スキル【友誼】

三級…心を通わせた魔物をタイムできます

スキル効果…《スライム》《以心伝心》《会話》

スキル効果に《会話》が加わったことで、僕は従魔のプラムたちと言葉を交わせるようになった。——こんなふうにね。

『ねえ、ロイ？』

『なに？ プラム』

『きょうはなんで、ハズレにいくの？』

プラムは僕の肩の上で首(?)を傾かしげ、そんなことを聞く。

言葉が通じなかったら、プラムは何か気になることがあるのかな？ そんなふうにしか理解できなかっただろう。

だから《会話》を習得できて本当に嬉しいんだ。それまでは、なんとなくプラムの気持ち分かる程度だったからね。

「ハズレに行くのは、塔の工房を調査するためだよ」

『ベアトリスさんの、しゅくだいだね』

その通り！ 師匠になってくれたベアトリスさんは忙しい。

ベアトリスさんは、『白夜の錬金術師』という二つ名を持つ、国一番の錬金術師だ。

なんでもラブリユスの領主である、迷宮伯家でのお仕事があつて、しばらく僕の授業ができないらしい。

そこで塔の工房の管理者でもあるベアトリスさんから、実益を兼ねた宿題が出されたんだ。

僕のスキルは『古王国の錬金術師が作った製薬スライム』の能力の影響を強く受けている。そのせいか魔法ではなく、錬金術に似ているようだと言った。

だからこの宿題は、僕のスキルをさらに磨くチャンスだ。

今、僕のお店で売っているのは、キラキラポーション改め『初級キラポ』と『中級キラポ』、そして『零級エリクサー』の三種類。商品として売れるものはまだまだ少ない。

古王国時代の工房を調査して、未知の素材や調査方法を知る。それはスキル効果、『素材解』《レシビ解》の精度を上げることに繋がり、錬金術師として成長するための第一歩になる。

だって素材を知らなければ、十分に薬を作り上げることはできない。

三つの素材が必要な薬があるとして、二つの素材しか知らなかったら正しい薬は作れない。試行錯誤で作れる可能性はあるけどね。
スキルを持っているだけじゃ駄目なんだ。僕自身も知識を付けて成長しないと、スキルを有効には使えない。

もっと多くの素材を知り、古王国時代や錬金術のことも勉強すれば、きっと【製薬】や【創薬】できるものが増えるはずだ！

「珍しいものとか、知らないものもいっぱいありそうで楽しみ〜！」

古王国時代の遺物を見られるなんて、僕は本当にツイてる！

あの場所には【時間停止】をはじめ、素材や機材、書物を守るための様々な術がかけられている。まったく劣化してない遺物なんて、迷宮城深層部でもなかなか見つかることはない。

『おもしろいぞさい、あるかな？』

ふるふるん！ とプラムは楽しげに体を揺らす。

これは食べてみたいと思っているな？ 僕は前世製薬スライムの勘でそんなことを思う。

実は、プラムは製薬スライムなんだよね。最初は紫色という、ちょっと変わった色のスライムっただけで、まさか製薬スライムだとは思っていなかった。

今日は店番をしているロペルも、同じく変わったスライムだ。

ドッペルスライムなんて魔物は、僕が知らないだけではなく記録にもないと思う。

製薬スライムを知っていた、ベアトリスさんでも知らない古王国時代の生き残りか、新種なのかは分からないけどね。

ロペルは見た目も変わっている。大きさは僕の胸あたりまであって、体の色は虹色が煌めく銀色のシャボン玉があったら、そんな感じだ。その体を鏡のように使い、ロペルは映り込んだ対象と目を合わせることで変化をする。面白い能力だと思う。

それから最近僕の従魔になった、たくさんの小さなスライム——子スライムって僕は呼んでるんだけど、あの子たちもちよつと変わった能力を持っている。

スライムは薬草を食べて魔力を得る。だけどあの子たちは、魔力を得て、その魔力を再び土地に還元しているようなんだ。

体内に取り込んだ素材を変化させ、魔力を増幅させて土地に還す。それは、体内に素材を取り込み薬を作る、製薬スライムと少し似た能力のように思う。

それともう一つ。薬草を育てることに特化した子スライムは、薬を作るために薬草を使う、僕や製薬スライムとすごく相性がいい気がする。

錬金薬師の僕は、薬を作るために薬草を使う。

製薬スライムは、薬を作るために薬草を食べる。

子スライムがいれば、必需品の薬草を効率よく育てられる。

実際、僕の工房では、迷宮産と同等の魔素を含んだ薬草を、たくさん収穫できてすごく助かって

るもんね。

実は子スライムって、古王国時代に製薬スライムのために作られた、古王国時代の生き残りなんじゃ？ って思うことがある。

「でも、僕の前世の記憶に子スライムはいないし……考えすぎかな」

スライムに好かれる僕と、そんな僕に懐いてくれたプラム。

なぜか僕に会いたいと、僕を捜していたロペル。

偶然出会った僕に、全員まとめてタイムされてくれた子スライムたち。

みんながどこで生まれ、どこから西の崖のハズレに来たのかは分からない。聞いてみたことはあるけど、みんな、口(?)を揃えてこう言った。

『おなじだよ』

『みんないっしょ』

答えになつてないなあと思ったけど、僕のお店で楽しそうに暮らす姿を見ると、まあいいかと思ってしまう。

『どうしたの？ ロイ』

「ううん、なんでもない。さあ、早く塔の工房へ行こう！」

僕は顔を覗き込むプラムにそう言うと、街の入口に立つ衛兵さんに「いってきます！」と声を掛け、駆け足で街道を進んでいった。



「あ、よかった。今日はいつも通りだね」

西の崖のハズレに着いた僕は、リュックから取り出した『簡易魔素測定紙』を広げ、魔素濃度を確認した。測定結果は青色だ。

簡易魔素測定紙は、周囲の魔素に反応して色が変わる魔道具だ。最低濃度の青から最高濃度の赤まで、寒色から暖色へ、濃度で段階的に色を変える。

前にハズレで測定した時は、魔素が異常に濃くなっていたのか、通常は出ない紫色が出て驚いた。「よし。進もうか、プラム」

『うん』

僕はプラムを肩に乗せ、歩き慣れたハズレを進んでいく。

ここ、西の崖のハズレは、はぐれ迷宮——いわゆるハズレだから、迷宮城のように濃い魔素で満ちていないのが正常だ。

迷宮城なら一階層でも、魔素濃度は黄色からオレンジ色の『中』になる。

少し前、ここで『十二迷刻』の前兆かもしれない異常が起きた。

今は僕の従魔になった、大量の子スライムたちが突然ここに現れたんだ。弱い魔物であるスライ

ムでも、大発生しているならば、そこは魔素濃度に異常が起きた可能性が高い。でもその時は、あまり魔素濃度は高まっていなかった。

よく分からない一件だったんだけど……迷宮城で十二迷刻の前兆が起きた今、ハズレでも油断はできない。

「十二迷刻……本当に起こるのかな」

『さあ〜?』

僕の独り言に、プラムはポヨポヨ揺れて答える。

十二迷刻とは、十二年に一度、地下迷宮城ラブリュスが組み変わる現象だ。

前回、十二迷刻が起きたのは、僕がギユスターヴさんに拾われた頃。

だから僕は十二迷刻がどんなものなのかよく知らない。前はイレギュラーがあったそうで、領主一族である迷宮伯家の方が犠牲になったと聞いた。

次の十二迷刻は、周期通りならあと半年ほどで起こるそうだけど、今回は前兆が起きるのが早すぎるらしい。またイレギュラーが起こらなければいいなと思う。

「何が起きてもいいように、僕も早めに十二迷刻の準備をしなくっちゃ」

薬種問屋のコンスタンタンさんも、十二迷刻に向けて薬草の需要が高まっていると言っていた。

僕は鍊金薬店の店主だ。お店はまだ正式に僕のものではないけど、それでも店名は『鍊金薬師口の店』。

十二迷刻で必要とされるだろう、体力回復ポーションと魔力回復ポーション、その二つの効果を併せ持つ零級エリクサーも、たくさん準備しなくちゃね！

「できれば新しい薬を作りたいなあ」

『いいねえ』

プラムがビヨン、ビヨンと縦に伸び縮みする。どうやらプラムもやる気みたい。

「よし。塔の工房で、新しい薬のレシピかヒントを見つけろぞ！」

ハズレはそんなに広くない。採取の寄り道をしなければ、塔まではすぐだ。

この塔は、製薬スライムだった前世の僕が暮らしていた場所だ。黒く重い扉を開けた先。今は薬草が少し生えているだけの何もない部屋だけど、ここに秘密の入り口がある。

「この扉、いつも思うけど開けにくいんだよね」

『そうだねえ』

床にある隠し扉を開けて、設置してあった縄梯子ななはしこに足をかける。

この空間から下には、【時間停止】や【状態保存じょうたいほぞん】の術がかけられているようで、縄梯子は全然劣化していない。

とはいえ、不安定な梯子だ。僕は逸はなる気持ちを抑え、慎重に下りていった。

「ふう。到着つとー！」

縄梯子を下り終えると、そこは夢のような場所だ。

「やっぱりいいなあ……この工房！」

僕は部屋をぐるりと見回しながら、白いローブを手ではたく。

「あ、汚れないんだった」

狭い場所を通ってきたから、ついやってしまったけど、ローブは真っ白のままだ。

「ベアトリスさんの【状態保存】はさすがだなあ」

【状態保存】は、任意の状態をそのまま維持する、とっても便利な魔術まじゆだ。国一番の錬金術師ほしが施した術なんだから汚れるはずがない。

このローブにかけられた魔術を使えるのは、今は錬金術師だけだ。

魔術とは、精霊の力を借りて行使する術で、古王国が滅んだ後——現在主流である、精霊の力を借りず、自身の魔力だけで行使する魔法まほうとは少し違う。

魔術と魔法、他にどんな違いがあるのかを簡単に言うと、威力に違いがある。

たとえば同じ『効果付与』でも、精霊の力を借りる魔術は、人の魔力だけを使う魔法よりも強力だ、しかも長持ちするんだって。

まあ、そもそも錬金術師のほとんどは魔人で、人と比べると魔力量が桁違けたがいに多い。そこに精霊の力まで借りたら、そりゃ強力な効果が付与されて当然だよな。

僕もスキルが覚醒した後、魔力が増えただけで、ベアトリスさんの魔力量には遠く及ばない。

『ロイ、はやくちようさしようよ』

プラムがビヨン、ビヨンと、柵の前で跳びはね催促する。

「あはは、そうだね！　じゃあプラムはそっちの柵から見てくれる？　見たことのない素材とか、変わったものがあつたら教えてね」

『まかせて』

プラムは胸(?)を張り、ドン！と叩いて、柵をシュルシュル登っていった。

「スライムっていいなあ……」

そんな言葉が零れて、僕はクスリと笑った。

僕が高い場所に登るなら梯子が必要だし、プラムみたいに素早くは登れないだろう。

製菓スライムだった頃は、スライムがいいものだと思っていなかったのに、人間に生まれ変わつたらそんなふう思うなんて。

「自由になれたから、そう思えたのかな」

ウキウキしながら柵を覗き込むプラムを見上げ、僕は呟いた。

「さて。それじゃ僕は本を見てみるぞ！」

これは僕にしかできない仕事だ。プラムは可愛くて力持ちで、とつても優秀なスライムだけど、残念ながら文字は読めない。

しかも、ここは古王国時代の工房だ。並ぶノートや本に使われる文字は古文。現代でこれを読

める人は多くない。

「古文字が読めるのは錬金術師くらいだもんね」

前世が古王国時代の製菓スライムだった僕は、なぜか読めるけど。

「うーん。我ながらすごいスライムだなあ」

独り言を零しつつ、僕は柵の端から本を手を取っていく。

「一冊目は『薬草と毒草』か」

——前世で僕は、お世話係の研究員たちが話す言葉を聞き、手にしていた書類やノートを覗き見することで、今でいう古文字や古語を覚えたようだ。

でも、そんなことってあり得る？

伝説の錬金王が作ったレアスライムなら、あり得るかもしれない。そう思ったし、実際、前世を思い出した後、僕は古文字を読めるようになった。

そういうこともあるんだろうな、実は僕、天才スライムだったのかも!?　なんて思ったりもしたけど……

『ロイ、ロイ!』

プラムに声を掛けられ、僕はパッと顔を上げた。プラムが片手で何かを抱え、シュルシュルと柵を移動してきていた。

「何か見つけたの!?　プラム」

『これ、なんかへん』

そう言って差し出したのは、硝子瓶ガラスに入った……なんだこれ？

「種……？　にしては少し大きいかな。クルミ？　それか干からびた木の実……あ、プラムっぽく？」

「んん？　とプラムが大きく首（？）を傾げた。

「あ、違うよ。プラムのことじゃなくって、果物くだもののプラムのほう！」

『なあんだ』

僕が笑うと、プラムも笑った。

「でも、本当になんだろうね？　何かの実だとは思うけど……」

僕たちは瓶をまじまじ見つめる。

これ、ちょっと奇妙だ。この工房は、空間全体に【状態保存】がかけられている。果物がこんなふうに干からびるはずがない。

だってこの時間は、古王国時代から止まったままなのだから。

「この瓶だけ【状態保存】が切れちゃってるのかな……あ、最初から干してあったのかも」

高級な茸きのこの中には、香りを引き立てるために干すものがあるという。それに薬草にも、干したほうが効果が高まるものがある。

「素材として使う果物で、干したほうがいいものなんてあったかなあ？」

『これ、うすいけど、まりよくをかんじるよ』

「え、薄いの？　じゃあ……保存に失敗したのかな」

僕は試しに《素材解》と唱え、干からびた丸い実を見つめてみた。が……

「駄目だ。なんにも分からないや」

前に《素材解》を使ったのは、バスチアの若旦那さんが作った『粗悪品の古文書レシピ』のポーションを解析した時だ。

「……あれ？　そういえばあの時のレシピってどうなったんだっけ」

ケチな若旦那さんが、買ったものを捨てるとは思えないけど……っていうか、あのレシピ、どこから手に入れたものだったんだらう？

僕とプラムを襲った後、若旦那さんは再度捕縛されたとは聞いた。でもその後、若旦那さんが証言した内容までは聞いていない。あの衛兵隊長さんなら、きちんと報告してくれそうだけど……

「いや、今はそれよりこっちだ」

僕は瓶に入った、丸い果物らしきものを見つめる。

前に《素材解》を使った時は、見るだけでは発動せず、ポーションをひと舐めしたら発動した。

たぶん僕のスキルが、製薬スライムの能力を継承したのだからだと思う。製薬スライムの能力は、体内に取り込むことで発動するからね。

「これも一口齧かるしかないのかな……」

『えええ、あぶない』

プラムは『やめたほうがいいよ』と言って、瓶を僕の手からスルリと取り上げた。器用……！

「うん。僕も正体が分からないものを口にする気はないよ」

……粗悪品レシピのポジションは舐めたけど。

「あ、そっか」

僕はそこで閃いた。

「《素材解》じゃ分からないのかも」

《素材解》は、【製薬】スキルに付属する効果だ。だとすると《素材解》は、素材そのものを解析するのではなく、薬に使われている素材が何かを解析する能力なんじゃ？

僕はそう思い、試しに手持ちの『初級キラポ』と、道中で採取した『迷宮母』を取り出した。

「まずは薬から……《素材解》！」

初級キラポの栓を抜き、ペロリと一口舐めた。

その途端、初級キラポに使われている素材が頭の中に浮かび、並んでいく。

「うん。前と同じ《素材解》だね。次は素材で試してみよう」

僕は迷宮母を一口食べた。

「《素材解》！」

しかし今度は何も浮かんでこない。

少し待ってみても、集中してもう一度《素材解》と唱えてみても変化はない。頭の中に浮かぶのは、甘くて美味しいという、迷宮母の味だけだ。

「……おいし」

『ロイ』

プラムがポヨポヨ横に揺れ、にゅっと手(?)を伸ばす。

あ、迷宮母か！ プラムから見たら、僕だけ突然おやつを食べたようなものだもんね!?

「ごめんごめん！ はい、どうぞ」

『おいし』

ぽーんと口(?)に放り込まれた迷宮母が、プラムの中でじゅわつと溶けていく。

「これも食べられたら早いのかなあ」

僕は謎の果実を見つめ溜息を吐く。

「正体は分からないか……」

ひとまず記録だけ付けて、詳しい調査はベアトリスさんに報告してからかな。でも……古王国の謎の果実なんて、すつごく気になる!!

そうだ、もしかしたら工房内にヒントが残されているかも。

「よし。棚の本を片っ端から見よう！」

『おもしろいもの、さがすよ』

プラムは棚を登り、僕は再び棚の本を手を取った。

「——ん？ なんだろうこの本」

いくつめの棚だろうか。少し疲れてきた僕は、床に座り込み本を確認していた。

そこで見つけたのが、どうにも場違いな古びた本だ。

「絵が多い……子供向けの錬金術の本かな？」

字も大きめだ。これはちよっとワクワクするぞ。子供向けの錬金術の本なら、基礎とか古王国時代の器具とか、基本的なことを知れるかも！

「あ、これ、ベアトリスさんから貰った初心者向けの本と似てる……」

やっぱり錬金術って、古王国時代から伝わる技術なんだな。ちよっと感動しながらページをめくっていく。

そして、そのページで僕の手が止まった。

「え、『賢者の石』……！」

そのページには、『いつか作れるかな？ 賢者の石』というタイトルと共に、様々な素材の絵が載っていた。

「わああ……！ 古王国時代には賢者の石があったのかな!？」

——賢者の石。



それは錬金術が到達した技術の最高峰。伝説の万能素材であり、幻の万能薬。今も錬金術師たちが研究している、究極の物質だ。

「大発見かもしれない……！」

思わずゴクリと喉が鳴った。

いいや、いけない、いけない。

気持ちには逸るし、素材の絵とかレシビっぽいものが気になるけど、順番通りに読まなくちゃ。レシビを正しく理解するため、安全に効果を生み出すためにも、手順は守らなければいけない。

「えっと……賢者の石は、赤く輝く柔らかい石である。賢者の石は——」

『大きな魔力の塊であり万能薬。万能の素材。なんでも叶える万能のアイテムのように語られるが、その本質は、使用者や素材の魔力、錬成物の力を何倍にも増幅させる——』

「——『増幅器である』!?」

そうなんだ!?

僕は目を見開き、文章を追っていく。ドキドキと高鳴る心臓のせいか手がちよつと震えている。

『賢者の石は、液体に溶ける性質がある』

「なるほど……そういうことかあ」

賢者の石は、万能薬エリクサーの材料の一つとも言われている。

賢者の石は固体。エリクサーは液体だ。石をどう素材として使うのか、ちよつと気になってたけど、溶けるなら使いやすそうだ。

一般的に、固体を液体に溶かし込むには、粉にすることが多い。だけど挽く手間や労力がかかるし、きちんと溶かすには溶解度の計算も必要だ。

効果が見込める分量の石を入れても、しつかり溶けなければ意味がない。もし溶けきらず容器に残ってしまったら、その分効力が落ちたり、最悪、効果が出なかったりする。

僕がプラムの傷を癒やすためにエリクサーを作った時——まあ、あのエリクサーは、『スライムに特化した上級回復ポーション』だったんだけどね。

あの時は急いでいたし、スキルで作ったから下拵えは何もしなかった。素材として使った、あの蒼色の結晶……製薬スライムたちの魔力結晶も、小さく砕くことさえせずに調合した。

でも、賢者の石が液体に溶ける性質を持つなら、単純に必要な分を入れるだけでいい。これは便利だ。

僕はそんなふうに、作り手視点で感心しつつ読んでいく。

次の項目は『賢者の石の素材を紹介しよう!』だ。

「ふふ。またこのスライムだ」

マスコットキャラっぽい赤いスライムの絵だ。子供向けの本だからか、タイトルや説明文に添えられていて、仕草がブルームみたいでちょっと可愛い。色は違うけどね。

「これが賢者の石の素材……」

『エリクサー』

『黄金のリンゴ』

『バジリスクの血』

『魔力』

挿絵を見ると、エリクサーは瓶に入った虹色の液体で描かれていた。

うん。僕がエリクサーをと願って【創薬】した、スライム特化上級回復ポーションとも、零級エリクサーとも色が違うね。

「……あれ？ エリクサーが賢者の石の材料？ エリクサーの材料が賢者の石じゃ……なかったわけ？」

んん？ どういうことだ？

僕は首を捻りながら、ひとまず読み進める。

二つ目の素材。黄金のリンゴは、その名の通り黄金色の林檎のようだ。

「そんな素材聞いたことないなあ。黄色的林檎……じゃないよね？」

挿絵的林檎は黄色だけど、キラキラを表す記号や効果線と一緒に描かれている。

「本当にピカピカ光る金の林檎なのかな」

あんまり美味しそうじゃないなあ。どこにあるんだろうな？

三つ目の素材。バジリスクの血は、もちろん血液……バジリスクという魔物の血だ。目を見開いた大蛇の絵が描いてある。

「バジリスクって伝説の魔物だね？ 本当にいるんだ……？」

孤児院にいた頃に読んだ、お伽噺に出てきた気がする。

確かバジリスクは、その目を見ると石化してしまう魔物だ。あと、血は猛毒で、体内に入ったら即死。触れただけで皮膚が溶けてしまうんじゃないかな。あ、血は猛毒で、体内に入ったら

「ん？ どうやって素材にするんだろう……毒抜きするのかな？ それとも他の素材に毒消し効果があったり？」

でも、わざわざ毒のある素材を使うってことは、その毒こそが大切なのかもしれない。毒を利用して症状を抑え込む薬もあるもんね。

「四つ目の素材は、魔力かぁ……あやふやだなあ」

挿絵は宝石のような光る石だ。

「……魔力結晶かな、これ」
僕が作ったエリクサーも、製薬スライムの魔力結晶を使った。零級エリクサーの素材には、魔力をたっぷり含んだ『苔の乙女の台座』を使う。
たぶん四つ目の素材は、錬金術師自身の魔力のことではなく、多くの魔力を持った素材のことだろうな。

僕はまたページをめくる。

今度は、赤いスライムが各素材の特徴や、その効果を説明しているみたいだ。

最初は赤い賢者の石と、虹色のエリクサーを手にした絵。

『賢者の石は不老不死の薬にもなるんだ！』

『万能薬のエリクサーも、上質なものは不老不死の効果が付くことがあるよ』

「ん？ 賢者の石とエリクサー、どちらにも不老不死の効果……？」

あ、でもエリクサーは『不老不死の効果が付くことがあるよ』か。

エリクサーは賢者の石の素材の一つだ。だけど逆に、賢者の石もエリクサーの材料だと、この本には書いてあった。

『賢者の石の説明には……あ、あった。『大きな魔力の塊であり万能薬』……か』

僕はページを遡り、賢者の石の項目を確認する。

賢者の石も、エリクサーも『万能薬』と書かれている。でも『不老不死』については表現に差がある。

「賢者の石は、エリクサーの上位互換って感じなのかな？」

上位互換だとしたら、材料にも共通点がありそうだな……

「賢者の石の材料……四つ目は『魔力』か」

本物のエリクサーのレシピはまだ分からない。

でも、『エリクサーをと願って作った、スライム特化の上級回復ポーション』は、体力回復ポーションと『魔力結晶』で作った。

『エリクサーと名に付く、零級エリクサー』は、体力と魔力、それぞれを回復するポーションの材料と『苔の乙女の台座』だ。

「……エリクサーの材料として必要なのは、やっぱり『高魔力』？」

もしかしたら、賢者の石でなくとも、同じくらい高魔力な素材を使ったら、本物の『万能薬エリクサー』を作れるのかもしれない……？

「そんな素材、簡単に見つかるわけじゃないか」

次の絵は、黄金色の林檎を齧るスライムだ。なぜか他よりも小さなスライムが描かれている。その隣には、顔(?)の両側から長い何かが生えたスライムもいる。

「なんたるこれ。エルフの耳っぽい……？」

その形はリディの耳によく似ている。これが頭上にあるなら角かな？　と思うけど、真横に両側
ときたら耳にしか見えない。でも、なんで？

『黄金のリンゴを食べると若返るんだって！　怪我や病気も治る万能薬だよ』

『黄金のリンゴは、アリアドネーの森の奥にあるらしい……』

また万能薬だ。エリクサーに黄金のリンゴ。二つの『万能薬』を素材にする賢者の石は、さら
すごい万能薬ってことかな。

それにエルフ耳のスライムが言ってる、黄金のリンゴがある場所……

「アリアドネーの森なんて聞いたことないなあ」

古王国時代の名所？　あ、エルフに関係した場所とか？

「それならリディが知ってるかも！」

ベアトリスさんや、ギユスターヴさんにも聞いてみよう。

次のバジリスクの血については、『バジリスクは強いから、注意して採取してね！』と書いて
あった。

「強いどころじゃない魔物だと思うけど……？」

え、というかお伽噺の中の魔物じゃないの？

最後の素材、魔力については僕の予想通りだった。

魔素が濃い場所で採取したり、素材から抽出したりした魔力結晶や、魔物から採取できる魔石、
魔力を豊富に含んだ素材を使うようだ。

「——ふう」

僕は静かに本を閉じる。

なんだか頭も胸もパンパンだ。新しい知識に触れて目がチカチカしているし、心臓の鼓動はまだ
少し速い。

古王国時代の子供も、初めてこの本を読んだ時はこんな感じになったのかな。

「賢者の石かあ」

作れるものなら作ってみたい。万能薬だというのなら、錬金薬師の僕も目指すべき頂なのだらう。

「でも、さすがに調合の手順までは書いてないね」

それに賢者の石の素材となる、エリクサーや黄金のリンゴ、バジリスクの血の入手方法もわから
ない。

それだけじゃない。エリクサーのレシピは？　黄金のリンゴがあるという、アリアドネーの森は
どこにある？　バジリスクは実在する魔物なのか、その倒し方と血の採取方法は？

「分からないことだらけだ」

僕は本を胸に抱え、ゴロリと床に転がった。

「子供向けの本だもんね。詳しく書いてないのも当然か」

賢者の石は、初心者が作れるようなものではない。キラキラ輝く夢として、それを目標に励んでほしい。そんな狙いで載せられた情報だろう。

載ってる場所も巻末だったしね。おまけだ。

「でも、僕の【製薬】や【創薬】スキルなら、賢者の石も作れるかもしれない」

この本を読んでそう思った。

僕は調査に必要な、機材や手順を飛ばすことができる。あとは素材さえあれば……

僕は一度、エリクサーの【創薬】に失敗している。

必要な素材が揃っていなかったからだろう。

瀕死のプラムを助けるため、【創薬】を願ったあの時に作れたのは、『スライム特化の上級回復ポーション』だった。

でも、失敗の原因は、僕の知識不足でもあったと思う。もしかしたらあの時、この工房にはもつとエリクサーに近いものを作れる素材があったかもしれない。

だけど僕は、それを選ぶことができなかった。知らないから、【創薬】レシピの選択肢に入らなかった。

「——だけど、素材の名前と絵だけだとしても、その存在は知った」

本をぎゅっと抱きしめ、目を閉じる。

これは賢者の石——錬金薬師の頂に登るための一歩だ。

「もっと知識を増やして、【創薬】の級位も上がったら、きっと僕にも作れるようになる……！」

『ロイ？ つかれた？ だいじょぶ？』

べたりと冷たいものが頬に触れた。ふふ、プラムだ。

「大丈夫だよ。ちょっと休憩してただけ」

『ほんとう？ ロイのまりよくへってる。なにしてたの？』

「え？ 本を読んでいただけだよ……」

僕は胸に抱く本を見つめた。

まさか、この本を読むのに魔力を使った……？

ゾクリと背筋が震えた。そんな本があるのか。

この本は、内容や文字の大きさから考えて、十歳未満の子供向けだと思う。一般的に、子供の魔力量は大人よりも少ない。でも僕は成人前だけど、大人にも負けない魔力量があると思う。その僕が疲れを感じるこの本を、小さな子供が読めるの？

「……あ、そっか。古王国の人たちは魔人だもんね」

魔人の特徴は、金眼や尖り気味の耳だけではない。寿命が長く、魔力量が多いのも特徴だ。

本に魔力を消費する仕掛けがあっても、問題ないのかもしれない。

「この本を読む魔力があるかないかで、錬金術師に向いているかを選別してたとか……？」

『へんなほん。ぼろぼろだね』

プラムのその言葉に、僕はハツとした。

確かに本は古びている。小さな子供が何度も何度も、繰り返して読んだと思われる汚れや擦れがある。

「もしかして、この工房の主が子供の頃に読んでいた本？」

この工房には【状態保存】の術がかかっている。だから何年経とうとも、本が古びることはない。つまりこの本は、ココに置かれた時から古びていたということだ。

工房の主は、賢者の石に特別な思い入れがある……？

「この隠し工房で、賢者の石の研究をしてたりして」

でも、製薬スライムの世話と研究をする錬金術師が？

レアスライムとはいえ、スライムは最弱の魔物だ。それに引き換え、賢者の石は錬金術師の憧れ。

錬金術の極みとも言える、究極の物質だ。イメージが違いすぎてどうにも繋がらない。

でも、それなら……錬金術師の最高峰に位置する人物ならどうだろう？

「古王国の錬金王は、賢者の石を作れたのかな」

『さあ……？』

プラムはまだ僕を心配しているのか、手(?)を伸ばして体のあちこちにペタペタ触れる。

「大丈夫だってば、プラム」

『だめ。きょうはここまで。おなかすいちゃった』

「え？ そういえば今って何時頃だろう」

僕は時計を持っていない。懐中時計は高級品だ。今の僕の稼ぎなら、買えないことはない。でも、まだ必需品ではない……と思っていたんだけど。

ぐうう。急に僕のお腹が鳴り出した。集中していて気付かなかったけど、もうお昼くらいかも。今日の調査は昼までに終える予定だったので、お弁当は持ってきてないんだよね。

僕は作業机に置いた砂時計を見る。時計を持っていない僕が、屋内で時間の経過を計るにはこれしかない。

だから棚の本を読む前に置いたんだけど……砂は全部落ちている。

「プラム、砂時計ひっくり返した？」

『うん。にかいやった』

これは一時間の砂時計だ。ということは、少なくとも二時間以上は経っているってこと。でも僕もプラムもだいたい夢中になってたし、プラムは砂が落ちた瞬間にひっくり返したわけじゃないだろうし……

ちよつと嫌な予感がするぞ。

「本当はもう夕方だったりして」

『まさかあ』

ポヨヨ、ポヨポヨと、プラムは笑うように小刻みに震えた。

慌てて塔の工房を後にし、ハズレから出てみると、太陽が頂点からそれなりに傾いていた。二時から三時くらいかな……

「プラム。走って帰るよ!!」

『うん』

僕は少し重くなったリュックを揺らして、プラムを肩に乗せて街道を走っていった。



「お店は大丈夫かな」

『ロペルなら、しんばいないよ』

「そうだね」

今日はリデイも来てるはずだし大丈夫か。

というか、お昼過ぎには戻るねって言ってきたから、逆に心配を掛けていそうだ。僕はもう店主

なんだから、もっとしっかりしなくっちゃ。

でも集中した甲斐あつて、工房の調査はだいぶ進んだと思う。

どんな本や書類があつたのか、タイトルと簡単な内容を添えてまとめた。プラムが見てくれた棚のほうも、正体の分からない素材や器具についてはスケッチと、特徴を書き記してきた。

そうそう、棚の素材をプラムに見てもらったのは大正解だった！

僕が知らない素材も、プラムはよく知っていたんだ。

薬草はさすがスライムだけあつて、見たことがあるだけでなく、食べたことがあるものも多かったらしい。ハズレにはない薬草まで知っていたし、魔物素材までよく知っていて驚いた。

……魔物、食べてないよね？ スライムは雑食だけど、プラムは製薬スライムだもん。見かけただけだと思いたい。

器具については、今使われているものと同じか、似ているものが多かったけど、よく分からないものもいくつかあった。ベアトリスさんなら知っているかな。

「ただいま！」

僕は大急ぎで店に戻り、ククルくんのようにバーン！ と扉を開けた。カララン、とドアベルがけたたましく鳴り、店内にいた数人のお客さんが驚いた顔で振り向いた。あ、失敗。

「ロイ。おそかったね」

「ロペル！ 困ったことはなかった？ ごめんね、遅くなつて」

僕はお客さんの間を縫ってカウンターに走り寄る。

「こまったことはないよ。ロイはなにかあった？」

「ううん、僕も大丈夫。ちよつと夢中になりすぎちゃって遅くなつただけ」

えへへ……と笑うと、ロペルだけでなく、店内のお客さんからも苦笑が漏れた。

「駆け出し冒険者にはよくあることね」

「無茶はすんなよ？ ラブリユスの錬金薬師さんに何かあったら、俺たちも困っちゃう」

そう言う彼の腕で、銀色の腕輪がキラリと光った。白銅ではない、銀の輝きだ。

冒険者級位は、下から青銅級、白銅級、銀級、黄金級、白金級となつている。白銅級の上位と、銀級の下位から中位までが一番層が厚い。

彼らはなんとなく、銀級の中位から上位の冒険者っぽい。持ち物とか雰囲気からそんな感じがする。

「えへ……お騒がせしてごめんなさい。えつと、どうぞごゆっくり！」

僕は肩の上に乗ったプラムと一緒に、ぺこりとお辞儀した。

ちよつと照れくさくて早足で工房に引つ込むと、リディが『永久薬草壁』の手入れをしていた。

「あ、ロイ！ おかえりなさい」

「うん。ただいま。リディ、朝から来てくれたの？」

「ううん、来たのはお昼の少し前よ。孤児院に行つて、下処理をお願いしていた薬草を引き取つてから来たの」

薬草は『保管庫』に入れてあるわ、とリディは言う。

この保管庫は、ベアトリスさんが【状態保存】を付与してくれた。新鮮なものも、熟成されたものも、その状態のまま保存できる、いわゆる『時止めの保管庫』だ。

「ありがとう、リディ。それにしてもこの壁、元気になつたね」

僕は壁一面どころか、部屋四面に茂る永久薬草壁を見回した。

ここに移植した当初は、うまく根付くか、成長してくれるか心配だったけど、さすが【緑の手】を持つリディだ。

「ふふ！ そうでしょう？ そろそろスキルの級位も上がっちゃうかも」

ハーフェルフで、実は貴族のお嬢様だというリディは二つのスキルを持っている。

一つ目は、冒険者向きの【魔法剣】。二つ目が、植物を上手に育てられる【緑の手】というスキルだ。リディにはこのスキルを使った、永久薬草壁の管理と世話をお願いしている。

【緑の手】はエルフの血が発現させたスキルのように、なかなか珍しい。

とうるかエルフも珍しい種族なだけだね。冒険者をはじめ、多種多様な人種が集まるここクラブリュスでも、エルフはあまり見かけない。

リディの他に僕が知っているのは、アルベール様のクラン『イグニス』の人と、ローブを作つて

くれた服飾師ふくしゅうしのラケシスさんくらいだ。

「ところで、ロイはお昼ごはん食べた？」

「えっ!? 僕、お腹鳴ってた!」

「え? 鳴ってないけど……あはは! ということは食べてないのね? プラムも?」
肩の上のプラムが大きく頷く。

「よかった! 今日は私が育てた野菜を使ってピザを焼いてみたの! 『収納バッグ』に入れてきたから温かいままよ」

「やった! ありがとう、リディ!」

プルルル! と、プラムが僕の肩で嬉しそうに左右に揺れ、ぴょんとリディの足下に飛んだ。
収納バッグであるポーチの中を見せられてらっている。

「ふふ。真っ暗でしょう? 出さないと見えないのよ」

『みせて、みたい!』と、空腹のプラムがプルルと揺れて催促をする。

『収納バッグ』は便利だ。空間が拡張されてるから、バッグの大小に関係なくたくさん入るし、
【状態保存】も付いている。素材採取の時にもあると重宝ちゆうぼうするんだよね。

「ねえ、リディ。収納バッグって、買うとしたらどのくらいの値段か知ってる?」

「う〜ん……お値段を聞いたことはないけど、買ったたら高いつて聞いたわ。これって錬金術師にか作れないんでしょう?」

「うん。あとは迷宮遺物として出てくるのを待つしかないみたい」

そんな幸運は滅多にないと思うけど。

「ベアトリスさんに依頼するか、ロイが自分で作ったら?」

「えっ、僕が!? 錬金術師の僕でも、いつか作れるようになるのかなあ……?」

「ロイのスキルは錬金術に似てるって、ベアトリスさんが言っていたんでしょ? いい師匠に
いてるんだし、きつと作れるようになるわ」

『くすりだまには、しないでね?』

プラムが、ぶつぶと笑って言う。

あ、そっか。確かに! 錬金術師である僕のスキルは【製薬】【創薬】だから、スキルで作れるのは薬だけ。スキルを使って作ると、どんな薬も『薬玉』の形で生成される。武器として投げて使う薬玉も、中身は『爆薬』とか『毒薬』だもんね。

てことは、僕のスキルで収納バッグは……作れない?

「うわ〜スキルなしで作るとなったら、何年修行しなきゃいけないんだろう?」

錬金術師になれるのが、ほぼ長命な魔人しかいない理由がちよつと分かった気がする。

修行にかかる時間が長いんだよ、きつと!

「さあ、ロイ。早く食べましょ! 先に食堂で用意してるから、荷物を置いてきてね」

「うん」

僕は急いでリュックを下ろし、中から採取してきた迷宮莓の袋を取り出した。子スライムにおねだりされたお土産だ。

「みんな〜！ おやつにどうぞ」

中庭の木陰でくつろぐ子スライムたちにそう声を掛けた。

『やった〜』

『まっかないちごがいい』

『みんなのぶん、ある？』

わらわら、わらわら。木陰こかげだけでなく、薬草畑の中に潜っていた子たちも出てきた。

「ちゃんとあるよ！ でも一人二個ずつくらいかなあ」

『これ、うえよう』

『たねだけのことさ』

『このへん、いちごのはたけにしよ！』

何匹かの子スライムがそんな相談を始めた。

この子たちなら、種からでも上手に育てられちゃうかもしれないね？

「ふふ！ 期待してるね」

『は〜い』

小さな手（？）がいくつも拳がった。

そして僕は食堂へ。

「あれ？ ロペルは？」

「ロペルは私と交代で、お昼休みを取って先に食べてもらったの」

「そうだったんだ。ありがとう、リディ。困ったことはなかった？」

「大丈夫よ。子スライムたちが助けてくれたし、お店番とっても楽しかった！」

普段リディはお店に出ない。アルベール様を避けてるらしいから、うっかり遭遇しないためだと思っ。

でもリディは接客に向いてると思うんだよね。

ポーシオンや薬草の知識はあるし計算も大丈夫。愛想もよく物怖ものおじしないし、万が一、乱暴なお客さんが来たとしてもリディには【魔法剣】があるし、ラブリユスの青銅級冒険者として顔も売れてきている。何も心配ない……というか、あれ？ 本当に僕やロペル、ククルくんより迷宮都市での接客に向いてるかも？

「さあ、食べましよう」

「わ〜！ おいしそう！」

「でしょう!? 焼いたのは料理人だけど、具材のナスとルッコラと、トマトソースもね、私が庭で育てたトマトから作ったものなの」

収納バッグから出したピザはホカホカで、生地きじの香ばしい香りと、緑が鮮やかなルッコラ、黄金

色に焼けたナス、トマトソースの赤色が見た目にも食欲をそそる。あと、とろけたチーズと、脂がテラテラ輝くベーコンもすっごく美味しそうだ！

リディが手際よく切り分けると、プラムは椅子からにゅうっと体を伸ばし、お皿を手(?)にプルプル揺れ始めた。

『まちきれない！』という声まで聞こえてきて、僕はプッと笑った。

『いただきます！』

『いただきます』

僕は大きな口を開け、プラムは『あちち』と言いながらピザに齧りつく。

『ど、どう？』

不安と期待が入り交じった顔のリディが僕らを見つめる。

『お、美味しい〜！ えっ、ナスってこんなに甘かったっけ!? トロトロで最高！』

『プルルルルル!!』

プラムはその美味しさを、大きく揺れることでリディに伝えている。

プラムに顔はないんだけど本当に表情(?)豊かで、リディにもすっかり伝わっているみたいだ。僕にはしつかり『おいしい！ あつい、おいしい！』って声も聞こえてる。

『よかった〜！ ロペルも美味しかったって言ってくれたんだけど……ん！ 本当ね、美味しくできてる！』

「うん！ ルッコラも美味しいね。味が濃くて他に負けてない！ トマトソースも美味しい〜！」

「本当？ トマトがたくさん採れすぎたから、ピューレにして色々使ってるってところなの。今度ロイにもお裾分けするわね」

「ありがとう〜！」

ああ、【緑の手】ってすごい！ 最高のスキルだね!!

ピザを平らげて、ふと窓の外を見ると、おやつを平らげた子スライムたちが、薬草畑に集まりもぞもぞ動いているのが見えた。早速、苺の種を植えてるのかも？ その窓際では、プラムがカーテンの陰でべたりと寝転んでいる。昼寝中みたいだ。

庭の薬草畑はだいぶ広くなった。

ここで採取できる薬草は、初級回復ポーションの基本素材である『日輪草』『黄金リコリス』『兎花』が多い。

でも最近では、スライムが好む環境に近付けようと作った池のほとりに『不忍草』なんかも生えてきた。

普通の中庭だったことも、子スライムたちの能力のおかげで魔素がだいぶ高まってきたみたいだ。そろそろ中級の薬に使う素材を植えてみてもいいかな。

「あ、そういえばククルくんはどこ？」

朝、僕が出掛ける時はまだ寝ていたみたいだったけど。

ふふ。あんな美味しいピザを食べたって知ったら、「ククルルも食べたかったにゃ〜！」って言いそうだな。

「今日は一人で迷宮城に行っているわ。昨日、一緒に迷宮城に行っただけで、採取が中心で『古王国のよく分からない古文書』探しあまりできなかったからって。ふふ！」

「ククルルくんらしいな〜」

「古王国のよく分からない古文書』集めは、ククルルくんの趣味だ。でも、一人でケットシーの郷を出て旅をするくらいだから、趣味の範囲を超えてると僕は思う。」

「ロイ。ククルルくんにも言ったんだけど、迷宮城に行くのは、しばらく控えたほうがいいかもしれないわ」

「何かあったの？ リディ。あ、採取はこの庭で十分だから？」

僕がリディに採取を依頼している素材は、庭の薬草畑で十分に採れる。子スライムたちがたくさん食べるから、そのぶん薬草もどんどん育つんだよね。

品質も迷宮城産のものとはほとんど変わらないし、最近保管庫のストックも増えてきた。確かに採取はちよつと控えてもよさそうだな。

「それもあるんだけど、なんだか迷宮城の様子がちよつと……おかしいまではいかないけど、ざわついているっていうか、少し変な感じがしたの。ククルルくんも気付いてはいるみたい」

二人は魔素や魔力に敏感だ。リディは魔物の居場所や数まで把握できる。ククルルくんは匂いで

色々感じるようだ。

「やっぱり十二迷刻が近付いてるんだね」

「ギルドでエリサさんに聞いたけど、他にも前兆らしいものがあつたようなの」

「そっか。それじゃポーションの準備を急がないと……」

もしも予定よりも早く十二迷刻が始まってしまったら、ポーションの数は足りなくなるだろう。魔法薬師たちは今まさに、来る十二迷刻に備えてポーションを増産している最中だ。他の薬も併せて作っているから、薬草も不足気味だと聞いた。僕のお店は、リディから買い取る契約をしているし、庭の畑のおかげで十分に足りてるけどね。

「ねえ、リディ——」

『チリリン チリリン』

「あ、『伝書便』だ」

伝書便は離れた場所から手紙を届ける魔道具だ。冒険者ギルドでは日常的に使われている。でも、そこそこ魔石を消費する道具だから、一般的には急ぎの用がある時にしか使われていない。

この伝書便は、ベアトリスさんが設置してくれたんだ。使う魔石も「そのくらい師匠に持たせなさい？」と言ってくれたのでベアトリスさん持ち。ありがたい……！